大阪の社会福祉

2019.10
773

The social welfare in OSAKA

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会　http://www.osaka-sishakyo.jp

CONTENTS

元気通信　西成区 萩之茶屋地域から　ふれあい喫茶はぎ ― 2
いきがい・助け合いサミットで大阪市内の取組みを発信 ― 2 3
居場所いろいろ　なかよし食堂（東住吉区）
　こどもたちの地域コミュニティ
　～卒園後も切れないつながり～ ― 3
市社協　経験をもとに考える、社協、行政、地域の連携
　～災害ボランティアセンター運営者研修～ ― 4
天王寺区　気づけるランド　～災害時の支援を考える～ ― 5
港区　地域には「お宝」がいっぱい　居場所・見守り・支え合い ― 6 7
施設協　地域に開かれた魅力ある施設を紹介 ― 7
こんなことやってます！私たちの施設から♪
　社会福祉法人 都島友の会
　特別養護老人ホーム ひまわりの郷
　カフェテリアから広がる、地域とのふれあい ― 8
令和元年度（第73回）共同募金運動はじまる ― 8

市社協　「やさしさとぬくもりのある福祉によるまちづくり」の実現をめざして

令和元年度　大阪市社会福祉大会

大阪市社会福祉大会の第1部では、地域福祉の推進に尽力され、その功績が顕著な社協役員やボランティア、また福祉の向上に功績のあった社会福祉施設・団体従事者などに対し、市長および市社協会長から、表彰状および感謝状を贈呈します。

第2部では「ダウン症の娘と共に生きて」と題し、金澤泰子さん（書家）による講演会を開催します。

本大会を通して、大阪市域における福祉活動への参加をより一層促進することで、「一人ひとりの人権が尊重されるやさしさとぬくもりのある福祉によるまちづくり」の推進をめざします。

第2部の講演会への参加ご希望の方は、総務課までご連絡ください。

市社協　令和元年度　大阪市社会福祉大会

日　時：令和元年10月30日（水）　午後2時～4時
会　場：大阪国際交流センター　大ホール
　　（大阪市天王寺区上本町8－2－6）
内　容：第1部　式典　　第2部　講演

講演内容

講　　師：金澤　泰子さん　（書家）
タイトル：「ダウン症の娘（こ）と共に生きて」

金澤翔子の母。
1943年生まれ、明治大学卒業。
書家　柳田流家元に師事。
1990年、東京・大田区に「久が原書道教室」を開設。
著書に「愛にはじまる」「天使の正体」「翔子の書」「涙の般若心経」その他多数。
久が原書道教室主宰。東京芸術大学評議員。日本福祉大学客員教授。

問い合わせ先：大阪市社会福祉協議会　総務課
☎06-6765-5601

HB

商店街が全国的に寂れてきている。それぞれの店で売っているものに合わせて、1軒1軒回っていくのが邪魔臭いのだろうか。店の人と話をしないといけないのが今風でないのだろうか▼そんなことより、商店街の周辺の高齢化が進み、さらに人口減が響いているのだろうか。10年ほど前までは、店じまいすると、すぐに次の入居希望の問い合わせがあったのに、と不動産屋さん▼そんな中で頑張っている惣菜屋さんがいる。近所の店が空くたびに、その空き店を買い、あるいは借りて、食堂を始め、お好み焼き屋さんを足し、八百屋さんも店開き。最近ではイベントスペースも確保し、そこで、高齢者向き食事サービスや子ども食堂も始めてしまった。毎朝4時起きでの格闘なのだ▼食堂での刺身定食は向いにある魚屋さんから取り寄せ、漬物も干物も近所の店からの取り寄せだ。商店街全体が繁盛しないといけないという志がいい。子ども食堂の子どもたちが大人になって、この商店街に愛着を感じ、近くに住み続けるまで頑張るとか▼個人の努力の話ではないが、この惣菜屋さんの頑張りに大きな拍手を送りたい。（石）

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

いきがい・助け合いサミットで大阪市内の取組みを発信

「いきがい・助け合いサミットin大阪」が、9月9日、10日に、グランキューブ大阪で開催された（主催：さわやか福祉財団）。全国から約3300人が集まり、全体シンポジウムや全54の分科会を通して、地域での支え合い・助け合い活動の展開や生活支援コーディネーターによる実践などについて学び合う機会となった。

会場の一角でおこなわれたポスターセッションには、全国から134点が集まり、大阪市内からは6区社協がエントリー。参加者はポスターを見て回ったり、説明を聞きながら、気に入ったものを選んでシールを貼って投票。

大会2日目には全体会場で、上位20団体が発表され、大阪市内からは城東区社協「赤いベンチプロジェクト」が7位（149票）、西成区社協「みんなで考え、つくる、あたらしい〝まち〟」が4位（189票）、そして、平野区社協「The 男組」が513票を集めて1位に輝いた。↖

全国1位、おめでとうございます！（平野区社協職員とThe男組の皆さん）

6区社協のポスターデータは
市社協内HP
ブログコーナーから

元気通信

西成区 萩之茶屋地域から

ふれあい喫茶はぎ

～お腹も心も満たされる地域のオアシス～

労働者たちが行き交い、彼らを支える居住・宿泊施設や商店が多く建ち並ぶ萩之茶屋地域。そこでさまざまな福祉事業を営む西成市民館2階で、毎月1回オープンする「ふれあい喫茶はぎ」は、オアシス的な居場所として地域の人々で賑わう。

開店前から並ぶ人もいるという「ふれあい喫茶はぎ」のメニューは、具だくさんのぶっかけそうめん、お好み焼き風の洋食焼き、ぜんざい、ミックスジュース、コーヒーと多彩で、どれも100円。栄養たっぷりの昼ごはんとデザートが楽しめ、多い日には約90人が訪れるという。

思い思いにくつろぎ、ゆったりと過ごせる空間

メニューが豊富

地域のさまざまなボランティアが結集して運営されており、その中心を担うのはホームレスの方や単身高齢者、生活保護の方々などに見守りや服薬ケアなどのサービス付き住居を提供するNPO法人サポーティブハウス連絡協議会のスタッフたち。代表の山田尚実さんは「ここは特徴がある地域。ここを住みよい町にしたいという志をもつ人たちが集まって、みんなで協力し合って活動しています。喫茶の利用者さんの9割以上が男性。お腹を空かせてやってきて、ガーッと食べて帰っていく。だから回転が早いです」と語る。ときどき自分のカップを持ってジュースを飲みに1階から上がってくる保育園のこどもたちは、利用者さんの楽しみになっている。

会場の中では、社会医療センターの相談コーナーもあり、血圧測定や健康相談も受けられ、それを目当てにやってくる方もいるという。地域住民でボランティアでもある食事サービス委員長の東谷高子さんは、「おいしかった！」「今日もありがとう」という利用者さんの声が何よりうれしいとやりがいを語る。

「おっちゃんたちが気軽に来れる場。ここでやって良かったです」と話すのは、ボランティアたちの奮闘を温かいまなざしで見守り支える、西成市民館館長の河﨑洋充さん。ボランティアが自然な優しさと温かい表情で利用者を迎え入れ、地域と共に歩む「ふれあい喫茶はぎ」は、もう一つの我が家と呼べる居場所であるに違いない。

また、会場内では、大阪市社協も後援団体の一つとしてブースを設置し、8月に完成した「大阪市における生活支援コーディネーター実践事例集」を配布した。事例集は、全24区社協の介護予防や居場所づくり、生活支援に関する取組み事例を収録しており、次月号であらためて紹介予定としている。

会場内で事例集600冊を配布

事例集は市社協ＨＰ内
調査研究・報告書コーナーから

平野区社協
The 男組

生野区社協
生野区における
「地域のお宝発表会」

港区社協
いきいき百歳体操を通じて
高齢者を元気にする取組み

西成区社協
みんなで考え、つくる、
あたらしい"まち"

城東区社協
赤いベンチプロジェクト

東成区社協
元気に参加・活躍できる
東成区をめざして

居場所いろいろ
―14―

こどもたちの地域コミュニティ
～卒園後も切れないつながり～

第二水曜日の夕方、東田辺会館ではこどもたちの元気な声が聞こえる。広々とした食堂、隣にのびのびと遊べるスペース。多いときは約140人が集まるそうだ。

なかよし食堂は、平成29年2月、「地域づくり」の一環としてスタートした。スタートにあたっては、連合町会長の荻野功さんが中心となり、地元商店街などに協力を呼びかけた。「対象を孤食の子どもに限定せず、地域も限定せず、一堂に集まり、交流を深めたかった」と地域活動協議会会長の生駒晃三さんと地区社協会長の堀川和子さん。特に就学前の子とその保護者に対し呼びかけた理由は「親同士が出会う機会が少ない時期。保育園や幼稚園で一緒に過ごしても、卒園すれば小学校は別々。親子ともどもつながりを持ち続けてほしい」からだ。

地域福祉サポーター松下さん（左端）とほか運営メンバー

なかよし食堂

- ・主　催：東田辺地域活動協議会
- ・日　時：第２水曜日　17:30～20:00
- ・場　所：東田辺会館（東住吉区駒川４－10－５）
- ・対　象：どなたでも
- ・料　金：こども無料（引率者300円）
- ・電　話：東田辺会館　06－6608－7621

この日は、野菜たっぷりのハヤシライス

食材の手配、献立づくりなど実務を仕切っているのは、地域福祉サポーターとして日ごろ会館に常駐している松下由佳子さん。

「ＰＴＡから何十年もお世話になった地域への恩返し」と、出会った人たちを結び付け、人を巻き込む力で、こども食堂の運営を支えている。食材は、商店街や地域住民からの寄附など。学校の協力もあり、校長が気軽に訪ねてこどもたちの様子も見守っている。

約20人のスタッフは地域のボランティア。調理と配膳を時間で交代したり、遊び場専門の人がいたり、得意分野を活かして関わっている。もちろん、配膳しながらもこどもたちに目配りすることも忘れない。賑やかな子が一人でいたり、お母さんのこどもへの言動が気になるなど、何かおかしいなと感じたら声をかけている。

食堂を開設して約2年半。当初の園児が小学生になり、食堂は、月1回窓会のような雰囲気に包まれる。親はこどもたちの成長を喜び、こども同士も「仲のいい友達と一緒に食べるのが楽しみ」らしい。

「会館に行けば何か楽しめる。何かあったときにも飛び込める。そんな安心できる場所にしていきたい」と松下さんはめざすところを語った。

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

市社協

経験をもとに考える、社協・行政・地域の連携

～災害ボランティアセンター運営者研修～

大阪市ボランティア・市民活動センター（以下、市ボラセン）は、8月22日、日本赤十字社大阪府支部で「災害ボランティアセンター運営者研修」を開催した。大規模災害に備え、行政との連携のもと社会福祉協議会が開設する災害ボランティアセンター（以下、災害VC）の運営をスムーズにおこなえるようにと企画され、今回で4回目の開催となった。冒頭、市ボラセンの岩本典子副所長が「災害VCを協働でおこなう意義を理解し、被災者支援を進めていくための力量を高めたい」と挨拶。会場には、各区社協および各区役所から80人の職員が参加した。

援助者は、隠れた被災者

第1部は、日本赤十字社大阪市支部の福祉・安全課係長の和田野元美さんによる『災害担当職員心のケア研修』。援助者は「隠れた被災者」。「終わりが見えない」「（被災者対応で）感情の矢面に立たされる」といった累積的なストレスがのしかかる。ストレスを自覚することが大切で「同僚との相互援助で連帯感を感じることによっても、ストレスへの抵抗力が高まる」と話した。

災害時の連携・対応について活発に意見交換

災害VCの設置基準を明確に

第2部では、大阪府北部地震の際、初めて災害VCを立ち上げ、41日間運営をおこなった枚方市社協よりフェーズごとの課題について報告された。社協・行政間の災害協定が未締結だったため、災害VCの設置に時間がかかったことや、災害VCにかかる費用負担についてなどの課題が残ったため、その後行政と話し合いを重ね、協定を締結されている。また、毎年実施の防災イベント「よどがわ防災まつり」の企画・運営に参加する大学生らが、災害VC立ち上げ当日から活動に参加。普段からの連携の成果がみえた。

小規模災害のため、通常の社協業務をおこないながら災害VCを運営されたため、運営スタッフ（職員）不足でマニュアル通りの体制が組めないなか、府内社協職員の応援やボランティアの力を借りながら臨機応変に対応されていた。

小規模災害用のマニュアルが必要

続いて、昨年の台風21号で被害を受けた港区社協が、災害時の対応と判断について述べた。停電が発生し、関係機関は復旧したが、区社協は3日間電気が通らず、実際に動いて知らせるしかなかった。そんな中、住民により身近な「地域見守りコーディネーター」が地域状況の聞き取り等で活躍し、平時から、支援の必要な人とつながっている強みを発揮したことがわかった。

課題として「停電時の連絡体制の構築、行政と連携するにあたってのルール作り、事業継続計画（BCP）の作成、日常業務と応急業務に優先順位づけ、職員の参集基準の明確化、小規模災害用のマニュアルづくり」などが挙げられた。

「我が事」として質疑応答に参加

災害時の「顔の見える関係」を構築

報告終了後、社協職員と区役所職員とが混在する8グループに分かれ、それぞれディスカッションをおこない、短時間ながら顔の見える関係を築いた。日本の災害ボランティアを研究するフランスの大学院生・イリオン・シャーロットさんは研修会に参加した感想を「立場を超え、親身になり、失敗例も共有していく連携のありかたに感心した」と話した。

司会を務めた市ボラセンの阪井誠一課員は「大阪府北部地震や台風21号で開催が延期され、2年ぶりの開催となったが、貴重な経験を共有できた。特に災害VC立ち上げ事例は、経験のない市社協にとって参考になる。今回の研修への参加が、行政、社協の連携のありかたを見直すきっかけになれば」と期待する。

天王寺区

気づけるランド～災害時の支援を考える～

避難所運営を疑似体験し、要支援者への配慮を考えよう

天王寺区社協では8月7日、区在宅サービスセンターゆうあいの2階で、令和元年度 第1回「気づけるランド～災害時の支援を考える～」を開催した。「気づけるランド」は平成29年度から始めた取組みで、災害時に手助けが必要な人への配慮や、日頃のつながりの大切さなどについて考えてきた。今回は防災士の資格を持つ親子を講師に招き、避難所運営ゲームHUG（ハグ）に挑戦。会場には、地域の親子、町会長、民生委員、ボランティアなど約30人が集まった。

こどもの視点から防災を考える

講師の出水季治（いずみすえはる）さんと息子の眞輝さんは天王寺区在住で、二人とも防災士。現在、小学6年生の眞輝さんは、全国最年少記録タイの9歳で防災士の資格を取得したという。日本防災士機構によって認証された防災士は全国に約18万人おり、講演会などの啓発活動や、災害時の避難所の運営などを担う。

講師を務めた防災士の出水季治さん（左）・眞輝さん親子

まず、眞輝さんがスライドを使ってプロフィールや日頃の活動について説明。これまで大阪市の各区長をはじめ、さまざまな人々との交流を通して多くを学んだと語った。「こどもも大人も、災害時には自分自身が生き残ることが大切。共に助け合う〝共助〟の輪を広げていくためにも重要です」と強調した。そして、こどももできる災害対策として倒れそうなブロック塀や自動販売機など、地域の危険なスポットを調べることを提案するなど、地域のことを学び、防災にもっと関心をもち、地域の人とつながる大切さを話した。

次に、曜日や時間帯をランダムに指定し、そのときに災害が起きたら、どのように対処すべきかを考えるワークを実施した。眞輝さんは「災害はいつ起こるかわかりません。そのことを再確認し、いつ起きてもいいように準備をしましょう」と語った。

HUGを通して育てる思いやりのこころ

次に、父親の季治さんの指導のもと、HUGを実施した。HUGは、H（避難所）、U（運営）、G（ゲーム）の頭文字をとったもので、避難所運営を考えるための図上でおこなうゲーム。参加者は8人グループで4つに分かれ、各グループには、年齢・性別・国籍・家族構成、車いす利用など250通りの状況が書かれた避難者カードと、避難所となる体育館や教室に見立てた紙が配られた。そして、阪神淡路大震災レベルの地震が起き、各グループで避難所の運営を任されたと仮定し、ゲームがスタート。避難者カードが次々と読みあげられ、内容に配慮しながら、どこに配置していくかを考えていく。さらに、救援物資、仮設トイレを設置する場所や、ペットを飼う場所も決めなければならない。読みあげられるスピードは早く、対処すべきことはすぐ山積みに。スムーズに対処するには役割分担がカギになるが、各グループみんなでアイデアや知恵を出し合いながら、議論が白熱していた。

意見を出し合い、みんなで工夫しながら避難所運営

HUGは、避難所で何ができるかを考える力や、思いやりのあるこころを育てることが狙い。季治さんは「例えば盲導犬であれば、生活するスペースに連れておきたいところですが、アレルギーのある人にも配慮しなければなりません。この機会に、さまざまな視点から考える習慣を身につけましょう」と話した。

区社協では、夏休みの自由研究として取り組めるように、ワーキングシートを作成。「気づけるランド」の体験を、シートに沿って記入すれば「夏休みの自由研究」になる。参加したこどもたちから「楽しかった。宿題もできた！」との声も。HUGを体験し、それぞれの立場でさまざまな〝気づき〟があったようだ。

区社協の大川敏子・事務局長は「避難所には、さまざまな事情のある人が来ることが想定されます。配慮が必要な方への支援など、大人もこどもも地域のみんなで考え、地域の防災力につなげていただければ」と締めくくった。

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

港区

地域には「お宝」がいっぱい

―地域のお宝見い～つけた～お宝ってなんだ!?居場所・見守り・支え合い―

港区民生委員児童委員協議会・港区地域ネットワーク委員会合同研修会が9月13日、港区民センターで開催された。「ご近所福祉クリエーター」として全国各地で講演する酒井保さんを迎え、第一部では、講演会「地域のお宝見い～つけた～お宝ってなんだ!?～」、第二部では、居場所、見守り、支え合いの3テーマで地域の取組み報告をおこなった。

数値化されない、気配り・心配りが地域の宝

最初に区社協の武智虎義会長が「この研修会が日頃の活動を振り返り、これからを考えるきっかけになってほしい」と挨拶した。

次に、講師の酒井さんが登壇。あちらこちらでおこなわれている居場所づくりや見守り活動など、地域には人と人とのつながりを絶やさないためのたくさんの仕組みがあり、地域活動は大きな役割を担っている。反対に、仕組みには取り上げられない普段当たり前におこなわれているあいさつや声かけを通した気配り・心配りなどのご近所同士の関係も、実は注目すべき素敵なつながり。そういった数値化されないものこそ「地域の宝」として大切にすべきであると強調した。

酒井 保さん

百歳体操やマッピング、たすけあい活動について報告

続いて、地域の「居場所」をテーマとして、市岡地域の百歳体操に関する事例報告。地域の会館、高層マンションの集会所、商店街の中にある布団屋さんなど、さまざまな場所での取組みが紹介された。当該マンション百歳体操世話人の吉田京一さんは、「現役時代は単身赴任が長かったので知り合いもなく、寂しい毎日でしたが、百歳体操がきっかけとなり、仲間ができて今は充実の毎日です」といきいきと語った。また、「ふとん館ひらのや」の中西寛美さんは「楽しみながら介護予防となり、お互いに変化を気づける居場所であり続けたい」と話した。

地域の「見守り」に関しては、港晴地域の見守りマッピングについて報告。マッピングでは、災害時の要援護者や高齢者、そのほか気になる方の住居を町会ごとに確認、共有した。マッピングに取り組むようになったきっかけは、昨年の台風21号で安否確認に戸惑ったことだという。地域活動協議会会長の黒川寿清さんは、「平時のつながりがそのまま災害時に活きるよう、少しずつでも近所の人と顔見知りになる機会を増やすこと、日々挨拶を交わすようにすることが大事」と話した。港晴地域では高齢者が多く見守りが必要な市営住宅への広報紙の配布を子ども会が担う取組みもおこなわれている。民生委員長の信野房代さんは「これらの取組みを通じ地域住民が日頃から見守りあい気にかけ合える地域にしていきたい」と語った。

そして、地域の「支え合い」に関しては、有償たすけあい活動について報告。ベランダ・窓拭き、庭木の剪定など、30分300円で請け負うこの取組みは、会員の居場所づくりにも役立っているという。活動に参加するようになったきっかけは自身の経験を活かしたいなどさまざまであるが、「活動を続けているうちに、自分も支えられていることに気づいた。相手に必要とされて元気がもらえる。それが支え合いのカタチ」と報告があった。

区社協の見守り相談室管理者の荻野和代さんは「人と人とのつながりが地域の宝であることを『居場所』『見守り』『支え合い』の取組み報告を通じて皆さんにお伝えすることができました。『地域の宝』は普段の地域生活を豊かにし、災害などの非常時にも力を発揮します。暮らしの中の何気ないあいさつや声かけ、ご近所同士の井戸端会議など人と人とのつながりの大切さを再確認する機会になりました」と語った。

発表された3つの「お宝」

居場所（市岡地域）

左から中西さん、吉田さん、小笠原さん（区社協）

見守り（港晴地域）

左から信野さん、黒川さん、荻野さん（区社協）、河本さん（見守りコーディネーター）

支え合い（たすけあい活動）

左から笹井さん、佐地さん、横田さん・久保さん（区社協）

施設協

地域に開かれた魅力ある施設を紹介

大阪市社会事業施設協議会のホームページを新設

大阪市社会事業施設協議会（以下、施設協）の加盟６団体（児童・保育・老人・生保・地域・障がい）の活動や加盟各施設（約1，100施設）の活動等を広く周知し福祉の魅力を伝えるため、施設協のホームページを新設しました。

今後、ホームページを活用し、多様な雇用形態による職員募集情報の掲載をはじめ、各施設の公益的な取組みの紹介や研修会等のさまざまな情報を広報します。

ぜひ、施設協のホームページへアクセスしていただき、ひとりでも多くの方に施設協の活動や施設への就職等に関心を持っていただける機会となるよう願っています。

HP：http://sisetsukyo.osaka-sishakyo.jp

善意銀行

平成31年２月15日～令和元年９月15日の預託・払出は次のとおりです

預託

<金銭>一般社団法人安原記念福祉財団から90万円

<物品>キリングループ労働組合協議会から車いす５台▶大阪海苔協同組合から車いす10台▶ハチ食品株式会社からレトルト食品3,120食▶株式会社セブン－イレブン・ジャパンから食品・生活用品等309箱▶住友生命福祉文化財団から第17回いずみホール夢コンサート鑑賞券89枚▶西日本電信電話株式会社関西事業部から厨房機器等

払出

<金銭>第33回帝塚山音楽祭へ20万円▶令和元年度帝塚山まつりへ30万円▶社会事業施設団体支援助成金として大阪市社会事業施設協議会加盟６団体へ60万円▶施設協ホームページ作成として大阪市社会事業施設協議会へ30万

<物品>大阪市生活保護施設連盟加盟15施設へ靴下3,000足▶大阪市児童福祉施設連盟加盟24施設へ靴下1,400足▶東淀川区社協へブルーシート20枚▶大阪市老人福祉施設連盟加盟15施設へ車いす15台▶市社協・15区社協・１団体へレトルト食品3,120食▶西成区社協へブルーシート20枚▶市社協・23区社協・施設協加盟18施設へ食品・生活用品等309箱▶14区社協へ第17回「いずみホール夢コンサート」鑑賞券89枚

風をよむ

老後生活と家計

大阪市立大学大学院　生活科学研究科　教授　所道彦

８月末になって、ようやく厚生労働省が公的年金財政検証結果を公表した。それによると、会社員の夫と専業主婦のモデル世帯の場合、年金の水準（所得代替率）は、現役世代の収入の50パーセント以上が維持される見込みとされている。しかしながら、この推計について、前提となる経済成長率やモデルの設定などが批判されている。また、今年の６月には、いわゆる「老後資金２０００万円問題」が注目を集めたことが記憶に新しい。老後生活の経済的な面に関しての「安心」が問われている。

ところで、年金の給付水準の議論の際の「現実社会の家族」と「モデル世帯」との乖離は、以前から指摘されていた問題であり、社会保障制度改革国民会議の報告書（平成25年）などでも「１９７０年代モデルの転換」の必要性が指摘されている。それでも、依然として１９７０年代的家族モデルを中心に年金水準が議論されていることをどう考えればよいのだろうか。

また、家計調査などのデータの赤字額を根拠にした「老後の蓄えに○○円必要」という話も（その妥当性も含めて）、ずいぶん昔からあるもので、今年になっての大発見というものでもない。これらの問題に対する「いまさら」の反応には驚くばかりである。

もちろん、老後の生活保障について、家計全体の検討が重要なことは間違いない。年金の給付額（収入）だけでなく、老後生活に関わる費用（支出）に注目する必要があろう。将来的な税金、医療保険や介護保険などの保険料、サービスの利用者負担の引き上げなどを踏まえずに、年金水準や貯蓄額だけを議論しても、十分とは言えない。生活費を捻出するためにサービス利用を抑制する人もいれば、住み慣れた家を処分する人もいるだろう。もう少し細かい家計のシミュレーションやプランニングが必要となっている。

資産の活用、雇用の継続など就労と所得保障のバランス、そして、自助努力を強調するだけでなく、格差の解消に向けた社会的取組みが、ますます大きな論点となる。生活問題とは、まずは経済問題であることを再確認しておきたい。

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

令和元年10月発行（毎月1回発行）発行／社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会
編集・発行人／西嶋 善親
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町12-10（大阪市立社会福祉センター内）
Tel.06-6765-5601 Fax.06-6765-5605 http://www.osaka-sishakyo.jp

私たちの施設から♪ 27

こんなことやってます！

社会福祉法人 特別養護老人ホーム 都島友の会 ひまわりの郷

特別養護老人ホーム ひまわりの郷は平成14年、社会福祉法人都島友の会の創設70周年事業として開設しました。都島友の会は現在、ひまわりの郷を含めた高齢者施設２施設、認定こども園４ヵ園、保育園（大阪４ヵ園・沖縄２ヵ園）、児童発達支援センター１ヵ園、児童館などを運営しています。創設者の比嘉正子は、社会福祉への強い関心から大阪市立北市民館に勤めた後、いち早く都島の地で青空保育園を開設。そして戦後には私財を投じて都島児童館を建設し、母と子、そして地域の絆を大切にした先駆的な保育事業を展開してきました。↙

カフェテリアひまわり

カフェテリアから広がる、地域とのふれあい

↘当施設では、もうひとつの「我が家」のような安らぎを入居者様・利用者様に提供することを介護理念としています。長年入居されている方が多いため、住み慣れた施設で自然に最期を迎えたいというニーズが増えており、看取り介護にも対応しています。ご家族には、空調設備やキッチンを設置した休憩室も設けています。また、当法人の保育施設に通う子どもたちとの親密な交流も、当施設の特色の一つです。月２～３回、日々の交流や催しを通して、子どもの明るい笑顔に接することは入居者様・利用者様の表情を豊かにします。さらに、地域との活発なコミュニケーションに努めており、地域の方々と一緒に楽しんだ歌謡ショーは大いに盛りあがりました。

今年の４月には１階ロビーと南側のテラスの全面改修をおこない、地域社会との交流をはかるため「カフェテリアひまわり」をオープンしました。道路に面した南側はオープンテラスとなっており、木陰に腰掛け、ゆったりとした時間を過ごせます。店内にはお子様のための絵本コーナーを設け、Wi-Fiも完備。メニューは淹れたてのコーヒーをはじめ、パスタやピッツァなどの軽食、限定ランチなどを用意しています。誰もが気軽に立ち寄れて、楽しめる「憩える場所」です。介護のことはもちろん、そのほかの悩みや不安などあれば気軽に相談もでき、地域住民がつながれる居心地のよい場所となっています。

住所〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-10-19
Tel 06-6924-8880
HP http://miyakojima.or.jp/himawarinosato/index.html

令和元年度（第73回）共同募金運動はじまる

今年も10月1日から、全国一斉に、共同募金運動が実施されます。

大阪府共同募金会は、長年にわたるみなさまのあたたかいご支援とご協力に深く感謝するとともに、住民に最も身近な地域福祉活動をより一層支援するために、募金運動への参加やいつでもどこでも寄付できるさまざまな機会をつくり、募金増に向け府民のみなさまや企業・団体にご協力を呼びかけています。

今年の募金目標額は歳末たすけあいを含めて、８億５千万円。府内の市区町村社会福祉協議会を通して行われる、住民のみなさまに身近な地域福祉事業や、社会福祉施設の整備、社会福祉団体・ボランティア団体等の活動支援などさまざまな福祉事業を支える大切な資金となります。

共同募金は、誰もが参加できるボランティア活動です。いつでもどこでも身近に取り組めるボランティア活動として是非とも多くのみなさまのご参加ご協力を今年もよろしくお願いいたします。（大阪府共同募金会）

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上
三井住友海上の守心
GK
クルマの保険 すまいの保険 ケガの保険
www.ms-ins.com